

『ドイツ語文化圏研究』 第14号 抜刷
2017年12月25日発行

日独語における小説の語りの態度の違いについて

— ドイツ語動詞 *scheinen* とその訳語「見える・思われる」を手がかりに
『ブッデンブローク家の人びと』の邦訳と『榎家の人びと』の独訳を例にして —

Eine Überprüfung des Unterschieds in der Erzählperspektive zwischen deutschen und japanischen Romanen

— Anhand einer Gegenüberstellung des Verbs „*scheinen*“ mit dem japanischen Verb
„*MIERU/OMOWARERU*“ in „*Buddenbrooks*“ und „*Nireke no hitobito (Das Haus Nire)*“ —

宮内 伸子

Nobuko MIYAUCHI

日本独文学会北陸支部

日独語における小説の語りの態度の違いについて

— ドイツ語動詞 *scheinen* とその訳語「見える・思われる」を手がかりに
『ブッデンブローク家の人びと』の邦訳と『楡家の人びと』の独訳を例にして —¹

宮内 伸子

1. はじめに

1.1. *scheinen* はコブラという指摘

本稿では、ドイツ語の三人称小説の地の文に出現する動詞 *scheinen* の使用例とその日本語への翻訳例、および *scheinen* の訳語「見える・思われる」のドイツ語への翻訳例を手がかりに、日独語における小説の語りの態度の違いを検証してみたい。

scheinen という動詞に注目して、小説の語りの態度を探ってみようと考えたきっかけは、*scheinen* はコブラ動詞の1つであるという指摘だった。ハラルト・ヴァインリヒの『テキストからみたドイツ語文法』の中にそのような説明を見つけ、筆者はそれまで *scheinen* をコブラ動詞という概念と結びつけて考えたことがなかったため、新鮮に感じるとともに、そうであるならば、この動詞が日本語に訳される際しばしば「見える」とか「思われる」とされているのがあらためて不思議に思えた。

ヴァインリヒの説明をまず紹介しておこう。

主体結合価動詞の中には、専門的な特殊な使い方を別にすれば、その意味からだけでは行為主体の意味を確定するには余りにも漠然としているものがある。我々はこれをコブラ動詞と呼ぶ。ドイツ語には *bin*, *werde*, *bleibe*, *scheine* などの動詞がそれで、文脈条件によっては *heiße* もそれに入る。² たいていの場合、コブラ動詞は、述語機能において語彙上の補足を必要とする。このような補足をここでは叙述詞と呼んでいる。叙述詞というのは、述語名詞、述語形容詞、述語副詞、述語付加部をまとめた上位概念である。

(中略)

¹ 本稿は日本独文学会北陸支部研究発表会（2016年11月12日、於：金沢）での口頭発表「三人称小説の語りにおける *scheinen* とその日本語訳をめぐる」に修正を加えまとめたものである。

² 橋本（1956）では、この5つの他に (*be*)*dünken* もコブラ動詞として挙げている。

bin 以外では werde, bleibe, そして (まれに) scheine がコブラ動詞として用いられる。これらは、叙述にもうひとつ意味特徴をつけ加え、次のように記述される。

werde: <確定> + <予見>

bleibe: <確定> + <経過>

scheine: <確定> + <蓋然性>

(中略)

scheine というコブラ動詞に関して問題になるのは、短い叙述詞だけである。それ以外は、むしろ scheine – zu sein という拡大化に逃げこむ。例をあげよう。

/du scheinst begabt/

[君は有能そうだ]

/du scheinst eine besondere künstlerische Begabung zu sein/

[君には芸術家としての特別な才能がありそうだ]³

コブラ動詞 scheine は述語名詞、述語形容詞あるいは述語付加部と共に単純なコブラ述部を形成することができる (2.5.2.2 参照)。この動詞にさらにそれ以上の規定詞がある場合は、zu 不定詞が多く見られる。それで格別に叙述の意味が変わることもない。

/er scheint ein Aussiedler aus Polen zu sein/

[彼はポーランドからの難民のように見える]

/der Betrieb scheint an ihm sehr interessiert zu sein/

[その企業は彼に大変関心があるように見える]⁴

ヴァインリヒは scheinen を、主語について蓋然性 (Wahrscheinlichkeit) を含んだ何らかの確定をしていると述べているが、挙げられた例文から、つまり、主語が述語の示す様相 (見かけ) を呈しているということであるのがわかる。ちなみに、引用部分にある例文のうち 110 頁からのものは「～そうだ」と訳され、282 頁からのものは「～ように見える」と訳されている。同書が複数の訳者による共訳で、引用した 2 か所の担当も別々の訳者だったことも一因だろうが、scheinen が日本語ではその両方の表現 (「～そうだ」と「～ように見える」) が共通して担っているような意味内容であることをはからずも示している。

³ ヴァインリヒ (2003) : 108-110 頁。「2.5.2.2 叙述詞を伴う叙述」の項より。

⁴ ヴァインリヒ (2003) : 282 頁。「3.4.4.2 zu 不定詞を伴う動詞」の項より。

1.2. 独和辞書での *scheinen* の訳語：見える・思われる

独和辞書で挙げられている *scheinen* の訳語も確認しておきたい。『アクセス独和辞典』と『小学館独和大辞典』の説明を以下に紹介する。

『アクセス独和辞典（第3版）』（2010年刊行）

scheinen 自動詞 (h)

[…のように] 見える, 輝く

①《zu 不定詞句》[…のように] 見える, 思われる

②（主に天体が）輝く, 光る, 照る

③【方向】[…に]（光が）射し込む

▶*wie es scheint*（または *wie mir scheint*）見たところ

【関連語】

aussehen（外見から）…のように見える

vorkommen（主に違和感を表して）…のように思われる

erscheinen 現れる, …のように思われる

strahlen（明るい）光を発する

leuchten（ランプなどの光源体が）輝く

glänzen（光源体でないものが光を反射して）輝く

blitzen きらりと光る

schimmern ほのかに光る

『小学館独和大辞典（第2版）』（1998年刊行）

scheinen 自動詞 (h)

1（英 *shine*）（光を発して・光を反映して）光る, 輝く, 照る, 光って〈輝いて〉見える

2（英 *seem*）（(ふつう *zu* 不定詞【句】と））（…であるように）見える,（…）らしい

このように独和辞書では *scheinen* の訳語として、「見える」や「思われる」が挙げられているのが通例である。併せてドイツ語の *scheinen* が、英語の *shine* と *seem* の2つの意味を兼用していることも確認できた。また、*sein*, *werden*, *bleiben* といった他のコブラ動詞とは異なり *haben* 支配であることもあらためて確認できた。

1.3. 日本語の「見える・思われる」の意味

日本語の「見える」や「思われる」の意味についてもここで確認しておきたい。近藤安月子と姫野伴子は『日本語文法の論点 43:「日本語らしさ」のナゾが氷解する』で、日本語文法の論点の1つとして「見える/聞こえる」を取り上げている。それを援用したいと思う。

「見える」「聞こえる」は、他動詞「見る」「聞く」の自発態と言われたり、自発性の意味を持つ自動詞（自発動詞）と分類されたりする。「自発」とは自然とそうなるという意味で、(1)(2)のように「見える」「聞こえる」はものや音が自然に目や耳に入ってくるということを表す。

(1) あ、スカイツリーが見える。

(2) おや、虫の音が聞こえる。

(中略)

「見える/聞こえる」は、「見る/聞く」とともに、知覚のうちの視覚と聴覚の営みを表す動詞である。

(7) 私がそれを見る/聞く。

(8) 私にそれが見える/聞こえる。

(7)(8)からわかるように、「見える/聞こえる」は「見る/聞く」と異なり、知覚主体が「が」格でなく「に」格で表され、また知覚対象は「を」格でなく「が」格で表される。小泉(1993)は、「に」格で表される知覚主体は動作主でありえず、知覚の「ありか」として捉えられた「経験者」(本書でいう「体験者」)であると言う。つまり「見る/聞く」は知覚主体が能動的に対象を捉える行為であるのに対し、「見える/聞こえる」は対象が知覚主体に到達して知覚主体が受ける受動的感覚である。⁵

この説明をまとめると表1のようになる。

(表1)

	見る/聞く	見える/聞こえる
知覚主体	「が」格(動作主)	「に」格(体験者)
知覚対象	「を」格	「が」格

⁵ 近藤/姫野(2012):88-89頁。なお引用文中の小泉(1993)とは、小泉保『日本語教師のための言語学入門』大修館書店を指す。

この説明では、見え方や聞こえ方の様相については触れていないが、知覚主体と知覚対象の関係は、見え方や聞こえ方についての叙述が文に加わった場合でも変わることはない。また「思われる」についても、「見える」と同様、能動的に対象に向かう行為ではなく、思考対象が思考主体に到達して思考主体が受ける受動的感覺と言うことができるだろう。

2. 調査

第1章第1節の終わりで確認したように、ドイツ語動詞 *scheinen* を使った文は、主語が述語の示す様相(見かけ)を呈しているという意味を持つ。主語の見かけの様子について、蓋然性を含みながら客観的に述べるという態度による発話である。そのような発想から出てくる文である。それに対し日本語の「見える・思われる」は、対象が知覚(思考)主体に到達して、知覚(思考)主体が対象を受動的に受け取ったという態度からの発話である。受動的感覺であるから知覚(思考)主体は動作主とは言えないが、その感覚を体験した者ではある。つまりそういう体験者の存在を前提とした表現である。独和辞書では、*scheinen* と「見える・思われる」が語として対応するかのよう記載されるが、それはそれぞれの語を用いて作られたドイツ語文と日本語文がほぼ対応するような意味内容になるからであって、双方の動詞の間には大元においてドイツ語と日本語の間の根本的な発想のちがいが存在している。

日本語と独英などのヨーロッパ言語とでは発話の視点(視座)が異なり、それが小説の語りにも反映して影響を及ぼしていることについては、すでにいろいろな言及が為されているが、*scheinen* という動詞を手がかりにしても、語りの態度の相違を検証できるのではないだろうか。それが本稿執筆の動機である。本稿では Thomas Mann (1875-1955) の *Buddenbrooks: Verfall einer Familie* (1901) と北杜夫 (1927-2011) の『楡家の人びと』(1964) を例に考察を行う。両作品は、内容的にも分量的にも大変よく似ていて、比較するのに適当と考えた。それぞれ原作と、邦訳ないし独訳を用いた。

2.1. Thomas Mann: *Buddenbrooks* に出現する *scheinen* の日本語訳

Buddenbrooks の地の文に出現する *scheinen* がどのような日本語に訳されているかを調べてみたところ、表2に示すような結果が得られた。調査は地の文に出現する *scheinen* の過去形 *schien* (*schienen* という語形を含む)を対象に行い、対応する個所の日本語を確認した。

ちなみに、この作品の邦訳は筆者の知る限りでは8種あるが、⁶ 今回の調査では望月市恵訳と川村二郎訳の2種を用いた。

(表2) 地の文に出現する *scheinen* の過去形の日本語訳 (全98例)

	望月訳	川村訳
見えた, 聞こえた等	15	18
思われた, 感じられた, 考えられた等	11	18
らしかった, ようだった, 様子だった等	50	45
その他	22	17

川村訳の方が、「見えた・思われた」系の訳語の使用が多少多く見られるものの、両者とも「らしかった・ようだった」等の、つまり、その様相の(受動的)体験者の存在を感じさせない訳語がより多く使用されていた。

- (1) (...), und das eine, kurze Jahr, das er an ihrer Seite hatte verleben dürfen, schien sein schönstes gewesen zu sein. (S.56)⁷

先妻のそばで過ごした短い一年間は、最良の一年間であつたららしかった。(望月訳, 上77頁)

彼が彼女といっしょに過ごすことのできたあの束の間の一年は、彼の最もかがやかしい一年だつたように思われる。(川村訳, 上929)

- (2) Das schien der charakteristische Geruch des kleinen Hauses zu sein, (...) (S.127)

この小さな家には、コーヒーの香りがつきものらしく, (...) (望月訳, 上178頁)

それでもコーヒーのおい^いがた^だよ^ってきた。どうやらこのおい^いが、この小さな家の特徴を示しているようだつた。(川村訳, 上2255)

⁶ 8種の訳者と出版年は次のとおり:成瀬無極(1932年),吉良良吉(1937-39年),実吉捷郎(1955年),川村二郎(1968年),望月市恵(1969年),円子修平(1972年),森川俊夫(1975年),松浦窓作(1976年)。

⁷ 文例の末尾に、使用テキストの当該ページ番号を示した。調査にあたっては電子書籍版で当該表現を検索し、紙の書籍でさらに確認した。ただし川村訳については電子書籍版のみを使用したためページ番号ではなく位置ナンバーを記した。なお、文例中の下線や波線は引用者(宮内)による。

- (3) Heute ließ er ein flüchtiges, heiteres und von einem kleinen krampfhaften Kopfschütteln begleitetes »Ahah« verlauten, das aus einer ungeheuer fröhlichen Gemütsstimmung hervorzugehen schien ... und doch durfte dem nicht getraut werden, (...) (S.205)

今日は、頭を痙攣的にふり動かし、たのしそうに短く「なるほど」とひびかせたが、……たのしくてたまらない気分から出たものらしかった。しかし、そうとばかり樂觀はしていられなかった。(望月訳、上290頁)

ところで今日の「あはあ」は、明るくあわただしく疾過するような、小きざみなひきつったような頭の振動を伴った「あはあ」で、極上の朗らかな気分から生まれたように思われ……しかも信用ならないものだった。(川村訳、上3681)

- (1) (2) (3) は望月訳ではすべて「～らしかった」等で翻訳されているが、川村訳では(1)と(3)には「～ように思われる」を用いている。表2からわかるように合計数では両訳とも同様の傾向を示してはいるが、個別に見ると一致しないケースも多々ある。このことは日本語において「～ように思われる」等と「～らしい」等が入れ替え可能なほぼ等価の意味で用いられていることの証左とも言える。

- (4) Nun umstanden sie weinend mit ihrer Mutter das Sterbebett des Vaters, und trotzdem es ihnen schien, als ob selbst dieser Tod noch von der Verwandtschaft in der Mengstraße verschuldet sei, ward doch ein Bote dorthin entsandt. (S.280)

その婦人たちも、今夜は母親と泣きじゃくって、父親が息を引き取ろうとしているベッドをかこみ、父親の死にメング通りの親類も責任があるように感じていたが、とにかくそこへも使いが飛ばされた。(望月訳、中43頁)

今この彼女たちが泣きながら母親とともに、父の臨終のベッドをとりかこんでいた。そして彼女たちにとって、この死さえもが、あのメング通りの一族の仕打ちによるもののように思われはしたものの、ともかく一人の使いの者がこの館につかわされたのだった。(川村訳、上5092)

- (5) (...), wobei die kleine Erika sich beinahe am meisten über die Servietten aus Seidenpapier freute, die ihr unvergleichlich schöner schienen als die großen leinenen zu Hause und von denen sie mit Erlaubnis des Kellners sogar einige zum Andenken in die Tasche steckte; (S. 357)

エリカ少女は、どんな料理よりも、薄葉紙のナプキンをうれしがり、家のリンネルの大きいナプキンよりも、くらべものにならないほどりっぱに感じ、給仕に頼んで二、三枚のナプキンを大切にポケットへしまいこんだ。(望月訳、中152頁)しかし小さなエリカにとっては、薄葉紙のナプキンが一番すばらしかったといってもよかった。うちで使っているリンネルよりも、この方が比較にならないほどきれいに見えたのだ。そしてボーイにことわると何枚か記念のためにポケットへしまいこみさえもした。(川村訳、上6547)

- (6) Und in der reizbaren Verfassung, in der er sich befand, schien es ihm, als drohe diese feindselige Macht ihn zu einem Fremden in seinem eigenen Hause zu machen. (S. 518)

そして、トーマスは、神経過敏になっていて、自分の家でこの敵意にみちた力である音楽が、自分を一人ぼっちにしようとしているように感じた。(望月訳、下8頁)いまのようにいらだたしい気分ときには、あの敵意にみちた力が、彼を、自分自身の家の中での異邦人に仕立てあげてしまうのではないかと、そんな気さえするのだ。った。(川村訳、下2195)

(4) (5) (6) のように scheinen に人を表わす3格、すなわちその受動的感覚の体験者が3格で明示されている場合には、日本語訳は「見えた・思われた」系の表現になっているのがわかる。「見えた・思われた」は本来その感覚の体験者の存在を前提としているから、scheinen に3格が伴っていればその者を体験者として訳出すればよいのである。ちなみに scheinen に3格が伴っていたのは98例中8例のみで、1割にも満たなかった。

- (7) Doktor Grabow fühlte den Puls; sein gutes Gesicht schien noch länger und milder geworden zu sein. (S.35)

ドクター・グラボーは、クリスチアンの脈を計っていたが、善良そうな顔を、いっそう長く、柔和にした。(望月訳、上50頁)

ドクトル・グラボーは脈をとった。人のよさそうな顔がひとときわ長く伸び、なごやかになったようにみえた。(川村訳、上561)

- (8) Frau Schwarzkopf, eine Pastorentochter aus Schlutup, schien ungefähr 50 Jahre zu zählen, war einen Kopf kleiner als Tony und ziemlich schwächlich. (S.122)

シュワルツコップのお内儀さんは、シュルートループの牧師の娘で、五十歳ぐらいであって、トーニの肩のあたりの背丈で、かなりほっそりとしていた。(望月訳、上172頁)

シュヴァルツコップ夫人は、シュルートループの牧師の娘で、年の頃は五十前後、トーニよりちょうど頭の方だけ背が低く、かなりやせこけてもいた。(川村訳、上2165)

(7)(8)は *scheinen* が蓋然性の意味合い抜きで訳されている例である。川村訳は(7)では「～ようにみえた」を用いているが、(8)では両訳とも原文が *scheinen* ではなく *sein* であってもおかしくない日本語になっている。日本語は話者の「見え」とおりに言語化されるので、⁸ いずれにせよ、すべて「見え」とおりにあるならば、「～である」と断定したところで結局、客観的事実を述べているというより、語り手にはそう見えたということになるからであろう。

(9) *Es schien, daß ihre Gedanken sie fesselten, daß sie weit abseits weilte und den »Bankerrott« beinahe vergessen hatte.* (S.220)

トーニは、なにか考えに沈んで、ぼんやりとしていて、「破産」のことも、忘れてしまったように見えた。(望月訳、上312頁)

心に浮かぶさまざまな思いに魅せられて、彼女はあらぬかたにさまよいてたような面持ちだった。「破産」のことなどまるで忘れてしまったようにみえた。(川村訳、上3966)

(9)は *scheinen* が単に外見の様相を示しているとは言えない例である。1つ目の *daß* 文は外見の様相と見なしでもよいが、2つ目の *daß* 文は周囲の作中人物たちがそう判断したということだろう。日本語訳ではそれが語り手の判断(推測)のように読める。

以上、*Buddenbrooks* の地の文に出現する *scheinen* の日本語訳について、文例を紹介しつつ見てきた。三人称小説の地の文に出現する *scheinen* は、「見えた・思われた」のようなその受動的感覚の体験者の存在が感じられるような日本語よりは、「らしかった・ようだった」

⁸ 池上守屋 (2009) : 60 頁。

のような、感覚の体験者の存在が前面に出てこない表現を使って訳されることの方が多いことがわかる。ドイツ語原文の客観的な語り口を日本語でも可能な限り伝えようとする対応と言えるだろう。

2.2. 北杜夫『検家の人びと』に出現する「見える・思われる」のドイツ語訳

scheinen の代表的な訳語として独和辞書に載せられてはいるものの、scheinen とは大元で発想が異なる「見える・思われる」だが、逆にこれらを用いた表現がドイツ語へ翻訳される場合にはどのように対処されているのだろうか。そこで、日本語による三人称小説の地の文に出現する「見える・思われる」がどのようなドイツ語に訳されているかについても調べてみた。scheinen が多く使われているのだろうか。『検家の人びと』の地の文に出現する「見えた」および「思われた」という「タ形」（いわゆる過去形）⁹を用いた表現とそのドイツ語訳の対応を確認したところ、表3（「見えた」のドイツ語訳）および表4（「思われた」のドイツ語訳）のような結果だった。

まず、「見えた」の調査結果から紹介していく。なお、表には不定詞で記入したが、実際の訳文中では動詞はすべて過去形である。また文例には参考までに英語訳も添えた。

(表3) 「見えた」のドイツ語訳 (全86例)

wirken	21
sehen	18
scheinen	13
aussehen	5
den Eindruck haben / den Eindruck erwecken	計3 (順に2, 1)
erscheinen	2
sich ausnehmen / bemerken / erkennen / erspähen / nachahmen / wahrnehmen / zeigen	計7 (各1)
その他 (offenbar 等の副詞の利用, 対応する訳を欠く, など)	17

⁹ 「見える」「思われる」という「ル形」も地の文に多数出現しているが、ここでは「タ形」に絞って結果を報告する。ちなみに「ル形」の場合も調査結果は「タ形」の場合と大きな違いはなかった。

- (10) いつもはだらしなかつたり馴軽だつたりする連中が、そんなふうに正装してもっともらしい顔をしていると、なんだかまったく別人のように見えた。(I/56 頁)

Diese jungen Männer, zu anderen Zeiten meist nachlässig gekleidet und für jeden Unsinn zu haben, wirkten mit ihrer formellen Kleidung und den ernsten Mienen wie verwandelte Wesen. (S.54)

These normally slovenly, facetious young men seemed quite different beings; it was as if they felt that this ceremonial garb reflected what they really were. (p.37)

- (11) 龍子の表情は一見至って冷静で、落着きはらったもののように見えた。(II/153 頁)
Ryūko's Miene wirkte extrem kühl und gelassen, was aber lediglich ein Beweis dafür war, wie sehr es in ihr brodelte. (S.440)

On the surface Ryūko seemed coldly in control, but this was merely an indication of things seething within. (p.349)

- (12) 艦艇たちは明らかに生きて、息づいて、何か得体の知れぬ目標にむかって身じろぎするのをじっと堪えているように見えた。(II/380 頁)

Die Schiffe lebten unzweifelhaft und atmeten, und es wirkte, als könnten sie sich nur mit Mühe zügeln, bevor sie Kurs auf ihr unbekanntes Ziel nahmen. (S.635)

The ships looked alive. They were breathing and trembling straining to be unleashed. (p.503)

- (13) ふ厚い防空頭巾をかぶりその上に鉄兜をかぶっているその姿は、頭でっかちの子供のように貧相に滑稽に見えた。(III/195 頁)

Er trug eine dicke Luftschutzkapuze, über die er einen Stahlhelm gestülpt hatte, und wirkte ebenso kümmerlich wie komisch, ein Kind mit zu groß geratenem Kopf. (S.818)

His head was covered in a protective hood with a steel helmet perched on top, which made him look like a child with an oversized skull, wretched and yet also ludicrous. (p.130)

(10) (11) (12) (13) は最も数の多かつた wirken を用いた訳例である。文例からわかるように wirken を用いた場合は、原文での知覚対象がドイツ語文では主語となる。こうすることによって、誰にとってそう見えたのかという、原文では明示されていない知覚主体をドイツ語でも示さずにすむ。

- (14) それからまた数日を経て、桃子が青雲堂のある小路を通りかかると、むこうから医局帰りらしい菫沢勝次郎が歩いてくるのが見えた。(I/209 頁)

Abermals vergingen einige Tage und Momoko schlenderte gerade die Gasse entlang, in der das Seiundō lag, als sie sah, wie ihr Nirasawa Katsujirō entgegenkam, vermutlich auf dem Heimweg von der Keiō Klinik. (S.183)

A few more days passed and Momoko was walking down the side street where the Seiundo was, when she saw Katsujiro Nirasawa coming from the opposite direction, probably returning from his work. (p.142)

- (15) 水平線が見え, 海と空のほかには何もなく、土佐沖を進行中と聞いた。翌日の朝、右舷に八丈島が見えた。(II/377 頁)

Er konnte den Horizont sehen, das Meer und den Himmel, sonst sah er nichts. Wie er hörte befanden sie sich auf der Höhe von Tosa. Am nächsten Morgen sah er steuerbords die Insel Hachijōjima. (S.632f.)

He could see the horizon, but nothing else besides the sky and sea. He heard they were passing south of Shikoku, and on the next morning he saw the island of Hachijojima away on the starboard side, which meant they must be about a hundred and fifty miles south of Tokyo. (p.500)

- (16) すると、すぐそこに海岸が見えた。(III/273 頁)

Ganz in der Nähe war das Ufer zu sehen. (S.883)

He could see the shore right in front of him. (p.182)

(14) (15) (16) は sehen を用いた例である。原文はいずれも知覚対象が「が」格で表されている。(10) (11) (12) (13) とは異なり、見え方の様相は述べられていない。ドイツ語訳では (14) (15) のように、文脈から sehen の主語を補い、知覚対象は目的語 (4 格や副文) にするか、あるいは (16) のように zu sehen sein の形で、原文の知覚対象を 1 格にし、受け身の可能性という表現にするかで対応させている。また、知覚対象が知覚主体に到達し得たということで、(15) のように können (英語訳 can) が併用される場合もある (英語訳は (16) も)。

- (17) 日曜で外来は休みなので人々の往来もなく、楡病院は一見しずかに憩っているように見えた。 (I/52 頁)

Es war Sonntag, die Ambulanz hatte geschlossen, und so blieb das übliche Kommen und Gehen aus – auf den ersten Blick schien die Klinik einen stillen Ruhetag zu genießen. (S.50)

No outpatients or other visitors came on Sunday, so nobody passed to and fro, and the whole hospital seemed to be enjoying a day of rest. (p.34)

- (18) 院長はしかし大して落胆もしないように見えた。 (I/131 頁)

Der Direktor allerdings schien dadurch nicht sonderlich entmutigt. (S.120)

The shock did not appear to affect the Director all that much; (p.91)

- (19) そして彼はふいに立上り、意外に素早い動作で——千代子にはなぜとなく物の怪のように見えたのだが——その姿はつと茶の間を出、うしろ手に障子をしめると、足音もなく千代子の視界から消えた。(III/106 頁)

(...), sagte er, stand abrupt auf und verließ mit verblüffender Geschwindigkeit – mit der Schnelligkeit einer spukhaften Erscheinung, wie es Chiyoko schien – das Wohnzimmer. Er schloss die Schiebetür hinter sich und verschwand lautlos aus ihrem Blickfeld ... (S.742)

He then stood up abruptly and moved with surprising speed (to Chiyoko's eyes with an almost spectral fleetness) across the room and left, closing the door behind him with one backward extended hand, and vanishing smoothly and noiselessly from her sight... (p.71)

(17) (18) (19) は *scheinen* が用いられた訳例である。3例とも「～ように見えた」とあるように、見え方の様相が表現されているケースである。(19) は千代子にはそう見えたということで、Chiyoko が3格で入っている。ちなみに、「見えた」の訳語として使われた *scheinen* で3格を伴っていたのは13例中この1例のみであった。英語訳は *seem* の他、*appear*, *to one's eyes* などを用いている。表3からもわかるように、「見えた」の訳語として *scheinen* の使用が際立って多いということはない。

- (20) 鉄柵の門と煉瓦塀は残っていたが、これがかつての楡脳病科病院のそれと同じものかと疑われるほどくすんで見すばらしく見えた。 (I/314-315 頁)

Das Eisentor und die Backsteinmauer waren vom Brand verschont worden, sahen aber so

verrußt und erbärmlich aus, dass es zweifelhaft schien, ob es sich tatsächlich um das Tor und die Mauer handelte, die früher vor den NIRE KLINIK FÜR GEHIRNPATHOLOGIE gestanden hatten. (S.270)

The iron gates and the brick wall remained, but they were so blackened it was hard to believe they were the same that had previously stood in front of the Nire Hospital, and they merely added to the sense of desolation. (p.214)

(20) は aussehen を用いた訳例である。aussehen は形容詞と共起することが多いので、見え方の様相が波線下線部のように形容詞で表現されている場合はこの動詞がよく使われていた。aussehen は外見のありさまを表現するため、「思われた」の訳語としては用いられていなかった。

(21) 第一勉強しようという意欲を持合せないように見えた。(III/372 頁)

Man hatte den Eindruck, dass Lerneifer nicht zu seinen Tugenden gehörte. (S.963)

The main trouble was he did not appear to have the slightest desire to learn anything. (p.244)

(21) は den Eindruck haben, dass ~ (～という印象を持つ) を用いた訳例である。この表現を用いての「見えた」の訳例はもう 1 例あるが、2 例とも man を主語に据えることで、知覚主体を特定しない工夫をしている。

(22) その身なり風態のため、彼は実際の年齢よりずっと老けて見えた。(I/6 頁)

Seine Kleidung und sein Aussehen ließen ihn weitaus älter erscheinen. (S.10)

(...), of his presence, and tended also to give an exaggerated impression of his years; (p.4)

(22) には erscheinen が用いられている。この例では、lassen と組み合わせて、「その身なり風態」を主語にし、「彼」を 4 格にしている。erscheinen による訳はもう 1 例あり、そちらは lassen と組み合わせていないが、どちらの例も、そのような様相を呈している側に焦点を当てることにより、知覚主体については触れずに済ませている。

次に、「思われた」のドイツ語訳について紹介する。調査の結果は表 4 のようであった。

(表4) 「思われた」のドイツ語訳 (全52例)

scheinen	12
erscheinen	9
den Eindruck haben / den Eindruck gewinnen / seinem Eindruck nach	計4 (順に2, 1, 1)
vorkommen	3
der Meinung sein / meinen	計3 (順に2, 1)
überzeugt sein / nach allgemeiner Überzeugung	計2 (各1)
eingestehen müssen / erkennen / sich erweisen / feststellen / finden / Gefühl haben / glauben / klingen / verschaffen / zeichnen	計10 (各1)
その他 (scheinbar, wahrscheinlich 等の副詞の利用, 対応する訳を欠く, など)	9

- (23) むしろ一種の畸形, 自然に反した異常発達, 脳下垂体ホルモンの分泌不均衡による肉体の滑稽な膨張と思われた。(I/112頁)

(...), vielmehr schien sie eine Art Deformation zu sein, eine groteske Anschwellung des Körpers infolge einer ungewöhnlichen Entwicklung wider die Gesetze der Natur, verursacht von einer unausgewogenen Produktion des Hypophysenhormons. (S.102)

(...); it seemed more an aberration, a deformity indeed, an unnatural, ludicrous swelling brought about by some imbalance in the secretions of his pituitary gland. (p.78)

- (24) そうしているうちに日本からの直接通信がはじめて倫敦に届いたという記事が新聞に出たが, それを読むと事態は更に深刻のように思われた。(I/299頁)

Und dann erschien ein Zeitungsartikel, der sich auf Nachrichten berief, die in London direkt aus Japan empfangen worden waren: Die Lage schien noch desolater zu sein als befürchtet. (S.258)

Eventually an article which claimed to be based on direct reports from Japan to London appeared in the newspaper, but it made the situation seem even more critical. (p.205)

- (25) 徹吉は休院を考えたが, ずっと減少しているとはいえ, 以前から入院している患者を無下に放りだすこともできないように思われた。(III/238頁)

Tetsukichi hatte bereits daran gedacht, die Klinik vorübergehend zu schließen, aber noch immer gab es, wenn auch in stark reduzierter Zahl, eine Reihe von Patienten, die er, wie ihm schien, nicht einfach auf die Straße setzen konnte. (S.854)

Fort that reason he had wanted to close the place down for the duration, and had been reducing the number of patients there for some time; but the hospital nevertheless stayed open. (p.158)

(23) (24) (25) は scheinen を用いた訳例である。(23) (24) は誰によってそのように思われたかを明示しておらず、ドイツ語訳でもその点には触れていない。だからといって両者が同じ語りの調子かとなると、そうとも言えない。(23) の原文は語り手にとってそう思われると読めるのに対し、ドイツ語訳では、作中人物たちがそのような感想を抱いたと読める。(24) は、原文には「新聞を読むと～のように思われた」とあり、新聞を読んだ結果、そのような感想を持ったと語られる。ドイツ語訳では、新聞記事 という名詞の説明をし、それを読むという行為については触れていない。誰かが読んでも読まなくても新聞記事は存在し、その記事が読まれれば～のような印象を与えるはず、という書き方をしている。日本語が動詞文体で、ドイツ語や英語などが名詞文体であるという指摘¹⁰ が思い出される。(25) は徹吉にとってそう思われたと原文に明示されており、ドイツ語訳でも徹吉が3格で明示されている。なお (25) は、英語訳は対応部分を欠いている。

(26) いつもにこにこと優しいその下田の婆やも、今や縁もゆかりもない不気味な怪物のようにすら思われた。(Ⅱ/38 頁)

(...), Tante Shimoda mit ihrem immerwährenden zärtlichen Lächeln – diese Frau erschien ihm jetzt wie ein unheimliches Monstrum, mit dem ihn nichts verband. (S.340)

(...), Nanny Shimoda of the endless affectionate smiles, but now she seemed to have changed into an eerie monster. (p.271)

(27) その仔猫、むくむくと綿毛のように動き何にでもじゃれつく七匹の仔猫、桃子にあってこの世にこんないとしいもの、生命を投げだしても悔いがないような存在はないとも思われた。(Ⅱ/100 頁)

¹⁰ たとえば、柳父 (1979) : 39-48 頁など。

Diese Kätzchen – sieben Kätzchen, die sich wie kleine flauschige Wattebällchen bewegten und mit allem spielten, was sie in die Krallen bekamen – erschiene Momoko liebenswerter und süßer als alles andere auf der Welt, sie hätte ohne Bedauern ihr Leben für sie gegeben. (S.395)

(...), and then three cats inevitably had kittens, seven of them. Nothing could have been more lovable than these little balls of fluff as they frisked about, plying with anything they came across; (p.314)

(28) 何もなかった。完全に何もなかった。少なくともそんなふうに思われた。(Ⅲ/326 頁)

Er hatte alles verloren. Alles und jedes verloren. Zumindest erschien es ihm so. (S.927)

He had nothing, nothing at all. At least, that was how it seemed to him. (p.216)

(26) (27) (28) は erscheinen を用いた訳例である。erscheinen が「～ように思われる」の意で用いられる場合は、scheinen と異なり常に 3 格を伴い、また zu 不定詞と結ぶことがない。(27) は受動的感覚の体験者である桃子が原文にもあり、それがドイツ語訳では 3 格で表されている。(26) (28) は文脈から、その感覚の体験者が 3 格 ihm で補われている。この補いは誤りではないものの、補うことで、その感覚の体験者が ihm で示された作中人物に限定されてしまうのも確かである。

(29) 疾患の精密な分類、症状に関する膨大な知識こそさずけられてはいたが、治療に関しては古代からいくらかも進歩していないように思われた。(Ⅱ/67 頁)

Tetsukichi hatte den Eindruck, dass die Medizin zwar zu präzisen Klassifizierungen von Krankheiten in der Lage war und ein immenses Wissen über Symptome besaß, auf dem Gebiet der Therapien jedoch seit dem Altertum nicht den geringsten Fortschritt gemacht hatte. (S.367)

So it seemed to him that, despite great advances in our knowledge and understanding of mental illness and in our ability to classify and recognize symptoms accurately, we had progressed little, if at all, beyond the methods of the bad old days where treatment was concerned. (p.292)

(29) は den Eindruck haben, dass ~ を用いた訳例である。原文では明示されていないものの、文脈からこの思いの体験者は徹吉だと読み取れる。ドイツ語訳ではその徹吉を主語に据えて、彼が感じたことを、「彼は～という印象を持った」という言い方にしている。英語訳は徹吉を主語にせず、him で示している。

(30) こうしてもう十数分も草の中に伏せていられることまでが稀有な幸運とも思われた。

(Ⅲ/27 頁)

Sogar der Umstand, dass er länger als zehn Minuten im Gras liegen konnte, kam ihm vor wie ein seltenes Glück. (S.675)

It was also a rare piece of good fortune to be allowed to spend more than ten minutes lying in the grass like this. (p.17)

(30) は vorkommen を用いた訳例である。原文には感覚の体験者は明示されていないが、ドイツ語訳ではそれを補っている。(26) (28) の場合と同じく、この補いは間違いではないが、補いによって意味が限定を受けることは否めない。英語訳では、be 動詞を用い、蓋然性の意味合い抜ききの文にしている。

(31) そうしないと呼吸麻痺のため二度と目覚めることはないと思われたからである。(Ⅰ/191 頁)

Er war nämlich der Meinung, andernfalls einer Atemlähmung zu erliegen und nie wieder zu erwachen. (S.169)

He was convinced that if he did not do so he would suffer paralysis of his respiratory organs, and never open his eyes again (p.131)

(31) は der Meinung sein を用いた訳例である。原文では誰にとってそう思われたのか明示されていないが、ドイツ語訳では1格で、つまり文の主語としてその思いの体験者を明示している。英語訳も同様の対処である。

以上、『榎家の人びと』から多数の文例を挙げつつ、日本語の三人称小説の地の文に出現する「見える」「思われる」のドイツ語訳について紹介した。表3、表4からも、いろいろな訳語が使用されているのがわかる。「見える・思われる」に1対1で対応するようなドイ

ツ語はない。また *scheinen* が飛びぬけて多く用いられていることもなかった。いろいろな語（主に動詞）がドイツ語訳に使われているが、*scheinen* も含め、知覚対象が発する印象を表現する動詞が多い。日本語の「見える・思われる」が、印象の受け手側からの表現であるのとは対照的である。*scheinen* には、そのもの自体が光を発したり反映したりで光る、輝くという意味があることともつながるのだろう。

3. 考察

3.1. *scheinen* と比喩表現との親和性

今回の調査をしながら、*scheinen* は比喩、とりわけ直喩表現と馴染みがよいらしいことにあらためて気づいた。以下の (32) (33) は *Buddenbrooks* からの *als ob* 副文を伴う *scheinen* の文例である。

- (32) Ja, er legte Unruhe und Verlegenheit an den Tag, sobald das Gespräch sich dem Verstorbenen zuwandte, und es schien, als ob er nicht nur die undelikatsten Äußerungen tiefer und feierlicher Gefühle, sondern auch die Gefühle selbst fürchtete und mied. (S.264)

さよう、クリスチアンは亡父の話になると、そわそわし始め、どきまぎしたが、深い厳肅な感情の無神経な発露を恐れたばかりでなく、感情そのものをも恐れて、逃
げているようにも見えた。（望月訳、中21頁）

たしかに彼は、話が故人のことに向けられるとたちまち、不安と困惑の色をうかべるのだった。深い厳肅な感情のがさつな表白ばかりでなく、そういった感情そのもの
のを、彼はおそれているようだった。（川村訳、上4781）

- (33) Beinahe schien es, als läche man auf seine Kosten, als läche man über ihn ... (S.278)

みんなは、クリスチアンを肴にして、クリスチアンを笑いものにしてしているようでも
あった。（望月訳、中40頁）

それはどうやら、彼がダシにされて笑われているようだった。彼のことが面白くて
笑われているようだった……（川村訳、上5045）

日本語訳に「～（の）よう」という直喩の「なぞらえ信号」¹¹ が用いられていることから

¹¹ 佐藤他（2006）：191頁。

も、scheinen とともに用いられたこの表現が直喩と解釈されていることがわかる。

以前、三島由紀夫の小説『愛の渇き』を手がかりに、直喩表現がどのようにドイツ語訳されているかについて調べたことがあった。その時、「対象が発する印象として訳出」するという、日本語文とはもの見方を逆転させた対応があることを確認した。つまり、原文の日本語は、印象の受け手（知覚主体）側に立って言語化しているのに対し、ドイツ語訳では、印象を発している側（知覚対象）を主体にして言語化するという対応がしばしば取られていたのである。日本語の直喩ではよく、「まるで～のように思われる」という表現が使われるが、そのような直喩表現が、wirken, gelten, aussehen, scheinen 等を使ってドイツ語訳されていた。¹²

3.2. scheinen による蓋然性 (Wahrscheinlichkeit) の示し方

(34) Er war bleich und schien gealtert. (S.212)

青い顔をしていて、年を取ったように見えた。(望月訳, 上 302 頁)

彼は色青さめ、ふけこんだ感じだった。(川村訳, 上 3835)

(34) は *Buddenbrooks* からの一文である。短い文中に2つのコブラ動詞 sein と scheinen を含んでいる。ヴァインリヒの用語を使うなら、bleich は「確定」で、gealtert の方は「確定」+「蓋然性」ということになる。この蓋然性について判定しているのは話者である。¹³ 話者による判定ではあるが、外見の様相に関して客観的に述べるという態度での発話である。ドイツ語の三人称小説の語り手が (34) のように語ったのなら、物語内で作中人物のこの er (彼) が周囲の人たちの目に年を取ったように映ったということになるだろう。特定の作中人物にとってそのように見えたという意味にする場合には、文に3格を加えてどの人物にとってそう見えたのかを明示する必要がある。

ところで、(34) の日本語訳を見ると、「ように見えた」「感じだった」となっている。いったい誰の目にそのように映ったのだろうか。誰がそのように感じたのだろうか。日本語母語話者がこの文を読んだなら、それは作中人物と視点(視座)を重ねた語り手であり、さらに、語り手に身を重ねて読み進める読み手でもあると、考えるのではないだろうか。

¹² 宮内 (2011) : 113 頁。

¹³ scheinen に相応する英語動詞 seem は「話者の思考を表す」と説明されている (長谷川 (1976) : 153 頁)。

3.3. scheinen ≠ 「見える・思われる」、scheinen ≡ 「見える・思われる」

本稿第2章で多数の訳例を挙げつつ見てきたように——少なくとも出版された翻訳書では——scheinen が即「見える」や「思われる」を使って訳されることは多くはない。「見える・思われる」は第1章第3節で確認したように受動的感覚であって、積極的に主体的な認知行為ではない。とは言うものの、この表現を用いたとたん、何かを視界に入れたり心に浮かべたりした誰かの存在が立ち現れる。日本語小説には消そうとしても消せない語り手の声があるとと言われるが、¹⁴ この「見える・思われる」もその声を感じさせる表現の1つである。

scheinen も「見える・思われる」も認知対象の印象を述べている訳だが、その表現の方向が逆である。日本語では認知主体が受けた印象をそのまま言語化するのに対し、ドイツ語では対象が発する印象の方に焦点を当てて（しばしば動詞の主語にして）言語化する。日本語では印象の受け手（作中人物のこともあるが、作中人物と一体化した語り手の場合もある）が主観的に語ることが多い。いわゆる「地上の視点」¹⁵ による語りで、語り手が作中人物に憑依するような形で物語の中に入り込んで、臨場的に語ることはごく普通に自然に行われる。一方、ドイツ語では客観的、俯瞰的な語りを——少なくとも19世紀の小説では——事とし、語り手が作中人物と場面に応じて自在に一体化するようなことはない。

このように日本語が「地上の視点」を好むことの根底には、発話原点が固定ないし安定しているという日本語の特徴がある。日本語に主語を欠いた文が多いのもこのためである。日本文学がその根のところで「語りの文学」であるのもこのことに起因している。反面、日本語のこうした特徴は、客観的な描写が日本語ではやりにくいということにつながる。語り手が主観的で臨場的な「地上の視点」を離れて、「神の視点」¹⁶ に立って客観的、俯瞰的に語ることがしにくいのである。

ここまでドイツ語動詞 *scheinen* とその訳語「見える・思われる」を手がかりに、三人称小説におけるドイツ語と日本語の語りの態度の違いについて考察してきたが、その際、*scheinen* と「見える・思われる」の違いを強調してきた。しかし、日本語が事態を主観的に把握して言語化することを好むのは事実として、日本語社会においては、「みんな」の代弁者・代表者として誰かが自らの「主観」を表明するという場面も多いのではないだろう

¹⁴ 熊倉 (2006) : 28-34 頁。

¹⁵ 金谷 (2010) : 184 頁。

¹⁶ 金谷 (2010) : 79 頁。

か。「日本語話者は共同で話す」と言われる。¹⁷ これは会話する際、話し手も聞き手も同じ方向を向いて、同じものに注意を向けるよう協力しつつ話す傾向のことである。従って「主観」と言っても、場を共有する者にとっての共通認識（その場の空気）を述べていることになるのではないか。小説の場合も語り手が「見える」とか「思われる」と述べても、それは語り手個人が受けた主観的印象を述べたことにはならないだろう。一方ドイツ語の *scheinen* は、動詞それ自体としては、主語が呈している様相（見かけ）を客観的に述べるという態度で文を作るものの、蓋然性を加えての意味内容になるから、その蓋然性の程度の判断は誰がしているのかという疑問が残る。そこを突き詰めると、結局話者（語り手）の存在が見えてくる。このように考えてみるなら案外 *scheinen* と「見える・思われる」は近似していると言ってもいいのだろう。

4. おわりに

本稿では、ドイツ語の三人称小説の地の文に出現する動詞 *scheinen* と、その辞書上の訳語として定着している「見える・思われる」の対比を手がかりに、日独語における小説の語り方の相違について検証を試みた。ドイツ語や英語等のヨーロッパ言語と日本語とでは発話の視点（視座）が異なり、それが小説の語りにも影響を及ぼしていることについてはすでにいろいろな言及が為されているが、*scheinen* という動詞に着目しても、語りの態度の相違を確認できるのではないかと考えてのことである。

このような仮説の下、Thomas Mann の *Buddenbrooks* と北杜夫の『楡家の人びと』を用いて、地の文に出現する *scheinen* と「見える・思われる」について、それぞれどのように日本語訳ないしドイツ語訳されているかを調べてみた。その結果、*scheinen* は、「見える・思われる」のような、認知対象がその身に到達した者、すなわち受動的感覚の体験者の存在が感じられるような日本語よりは、「らしい・ようだ」のような、感覚の体験者の存在が前面に出てこない日本語を使って訳されるケースが多いとわかった。これはドイツ語の客観的な語り口を日本語でも伝えようとした結果だろう。一方、日本語の三人称小説の地の文に出現する「見える・思われる」は、かなりいろいろなドイツ語を使って訳されていた。*scheinen* が飛びぬけて多く用いられていることもなかった。いろいろな表現が使われてはいたが、総じて知覚対象を主語に据えてそれが発する印象を表現するという形式の文にされているケースが多かった。*scheinen* の他 *wirken*, *aussehen*, *vorkommen*, *den Eindruck*

¹⁷ 池上守屋 (2009) : 124 頁。

erwecken などを使ってである。知覚対象が発する印象は、しばしば直喩を用いて表現されるが、これらの動詞はいずれも直喩表現との相性がよい。

このように、scheinen と「見える・思われる」は、辞書では結びつけられているものの、似て非なる動詞と言える。「見える・思われる」は、受動的感覚を表現しているのであって、主体的で積極的な行為ではない。しかし、この表現を用いるやいなや、その受動的感覚を体験した者の存在が立ち現われる。小説の地の文の場合は、語り手の声が聞えてくる。一方、scheinen は知覚対象が発する印象を、その知覚対象の方を主語に据えて表現する動詞である。陳述姿勢はあくまで客観的である。「見える・思われる」が印象の受け手側に立って、知覚主体が受けた印象をそのまま主観的に表現するのは対照的である。

事態の把握・言語化において両者はこのように対照的であるが、もう一步踏み込んで考えてみると、両者は案外近いことにも気づかされる。事態の主観的把握を好む日本語であるが、日本語社会での個人の主観とは、「みんな」の代弁者としての「個人」ということで、結局「みんな」の主観ということになってしまう場合も多い。小説の語り手が「見える・思われる」と述べても、それは作中人物や読み手を含んだ「みんな」の共通理解を述べていると考えるべきである。ドイツ語の scheinen の方は、主語が呈している様相について蓋然性を加えながらもあくまでも客観的な陳述態度をとっているが、突き詰めていくと、蓋然性の程度は誰が判定しているのかという疑問が生じてきて、結局、語り手の存在が露呈してしまう。19 世紀の小説では客観的、俯瞰的な語りが違和感なく受け入れられていたが、客観性への疑念が唱えられるようになるにつれ、小説の語り方にも変化が見られる。¹⁸ そのなかで、いわゆる 19 世紀的な書き方を続けたトーマス・マンの小説にはレトロな雰囲気も感じられる。本稿では踏み込めなかったが、カフカの作品で動詞 scheinen の使い方が注目されることがあり、マンの場合と比較することによりドイツ語小説の語りの変容を考察する重要な手がかりになると考えるが、それについては今後の課題としたい。

¹⁸ 「19 世紀後半からは物語の「語り」においても大きな変化があり、物語はますます作中人物の視点から語られるようになりました。」(鈴木 (2005) : 66 頁)。また、観客参加型の不条理演劇の出現も、それまでのきっちり構成された人間中心の物語への不信感が背景にあると思われる。

使用テキスト

Thomas Mann: *Buddenbrooks: Verfall einer Familie*. Gesammelte Werke in Einzelbänden. Frankfurt am Main (S. Fischer), 1981. (キンドル版, 2015年)

トーマス・マン, 望月市恵訳『ブッデンブローク家の人びと』(上・中・下) 岩波文庫, 1969年.

トーマス・マン, 川村二郎訳『ブッデンブローク家の人々』(上・下) グーテンベルク 21, 2009年 (キンドル版).

北杜夫『楡家の人びと』(第I部・第II部・第III部) 新潮文庫, 2011年. (キンドル版, 2013年)

Kita Morio: *Das Haus Nire: Verfall einer Familie*. Aus dem Japanischen übersetzt von Otto Putz, Berlin (be. bra), 2010.

Morio Kita: *The house of Nire*. Translated by Dennis Keene, New York (Kodansha international), 1984. (第I部・第II部の英語訳)

Morio Kita: *The fall of the house of Nire*. Translated by Dennis Keene, New York (Kodansha international), 1985. (第III部の英語訳)

参考文献

荒木博之 (1994): 『日本語が見えると英語も見える: 新英語教育論』中公新書.

池上嘉彦 (2006): 「(主観的把握) とは何か: 日本語話者における〈好まれる言い回し〉」, 『言語』2006年5月号, 20-27頁.

池上嘉彦 (2011): 「日本語と主観性・主体性」, 『主観性と主体性 (ひつじ意味論講座 第5巻)』ひつじ書房, 49-67頁.

池上嘉彦/守屋三千代 (2009): 『自然な日本語を教えるために: 認知言語学をふまえて』ひつじ書房.

井出祥子 (2006): 『わきまへの語用論』大修館書店.

ヴァインリヒ, ハラルト (2003): 『テキストからみたドイツ語文法』(脇坂豊他訳) 三修社.

大藪正彦 (2016): 「間主観性と空間把握」, 宮下博幸 (編) 『ドイツ語と日本語に現れる空間把握: 認知と類型の関係を問う』, 日本独文学会研究叢書, 第112号, 51-65頁.

金谷武洋 (2010): 『日本語は亡びない』ちくま新書.

熊倉千之 (1990): 『日本人の表現力と個性: 新しい「私」の発見』中公新書.

熊倉千之 (2006): 「(主観) を本質とする日本文学: 語り手の声が出する世界」, 『言語』

- 2006年5月号, 28-34頁.
- 小谷哲夫 (1982): 「カフカの物語世界におけるパースペクティブと語りの技法について」,
『明治大学大学院紀要, 文学篇』第19号, 95-106頁.
- 近藤安月子/姫野伴子 (2012): 『日本語文法の論点43: 「日本語らしさ」のナゾが氷解する』
研究社.
- サイデンステッカー, E.G./安西徹雄 (1983): 『日本文の翻訳』大修館書店.
- 佐藤智美/栗林澄夫 (2002): 「表現と視点: フランツ・カフカの場合」, 『大阪教育大学紀要,
第I部門』第51巻, 第1号, 21-39頁.
- 佐藤信夫/佐々木健一/松尾大 (2006): 『レトリック事典』大修館書店.
- 鈴木康志 (2005): 『体験話法: ドイツ文解釈のために』大学書林.
- 成田節 (2009): 「視点と日独語の表現: 翻訳の対照を手がかりに」, 『東京外国語大学論集』
第79号, 399-414頁.
- 成田節 (2012): 「翻訳と語り手の視点: 三人称物語における情景描写を例に」, 竹内義晴(編)
『翻訳という問題から見えてくる言語, 文化, 人間』, 日本独文学会研究叢書, 第85
号, 22-39頁.
- 橋本文夫 (1956): 『詳解ドイツ大文法』三修社.
- 長谷川潔 (1976): 『日本語からみた英語: その類似と異質』サイマル出版会.
- 廣瀬幸生/長谷川葉子 (2010): 『日本語から見た日本人: 主体性の言語学』開拓社.
- 宮内伸子 (2011): 「日本語の直喩表現はどのように翻訳されているか: 三島由紀夫の『愛
の濁き』のドイツ語訳を手がかりに」, 日本独文学会北陸支部『ドイツ語文化圏研究』
第9号, 92-122頁.
- 宮内伸子 (2013): 「日本語らしい「地上の視点」を探る: 宮部みゆきの『火車』における
恩恵授受表現のドイツ語訳を手がかりに」, 日本独文学会北陸支部『ドイツ語文化圏研
究』第10号, 43-74頁.
- 森田良行 (2006): 『話者の視点がつくる日本語』ひつじ書房.
- 柳父章 (1979): 『比較日本語論』日本翻訳家養成センター.
- 山岡實 (2000): 『「語り」の記号論: 日英比較物語文分析』松柏社.
- 山中博心 (2012): 「カフカの『変身』をその言語使用の視点から再読する (研究ノート)」,
『福岡大学人文論叢』第43巻, 第4号, 835-844頁.
- 横田隆志 (2008): 「日本語初級教材のイラストに見られる「視点」の分析」, 『北陸大学紀
要』第32号, 217-224頁.

Eine Überprüfung des Unterschieds in der Erzählperspektive zwischen deutschen und japanischen Romanen

— Anhand einer Gegenüberstellung des Verbs „scheinen“ mit dem japanischen Verb
„MIERU/OMOWARERU“ in „Buddenbrooks“ und „Nireke no hitobito (Das Haus Nire)“—

Nobuko MIYAUCHI

In der vorliegenden Arbeit wurde ein Unterschied in der Erzählperspektive zwischen deutschen Romanen und japanischen Romanen überprüft, anhand einer Gegenüberstellung von dem Kopulaverb *scheinen* im deutschen personal erzählten Roman mit dem japanischen Verb MIERU/OMOWARERU, das im Wörterbuch als Übersetzung von *scheinen* üblich ist.

Schon in mehreren Beiträgen wurde erwähnt, dass es zwischen dem Japanischen und europäischen Sprachen wie Deutsch und Englisch bei Äußerungen Blickunterschiede gibt und dadurch die Erzählweise des Romans beeinflusst wird. Die Verfasserin meint, dass der Unterschied der Erzählweise auch anhand des Verbs *scheinen* festgestellt werden kann.

Unter dieser Hypothese wurde eine Untersuchung vorgenommen, wie das Verb *scheinen* im Erzählteil von *Buddenbrooks* ins Japanische und das Verb MIERU/OMOWARERU im Erzählteil von *Das Haus Nire* ins Deutsche übersetzt wurden. Es ergab sich, dass *scheinen* vielmehr durch das Verb RASHII/YOUDA übersetzt wird, wobei man nicht das Wesen der passiven Wahrnehmung spürt, wie bei dem Verb MIERU/OMOWARERU, bei dem sich die Art der Wahrnehmung deutlich spüren lässt. Die japanischen Übersetzer versuchten, die objektive Erzählweise des Originals möglichst wiederzugeben. Das Verb MIERU/OMOWARERU im Erzählteil des japanischen personal erzählten Romans wurde mit verschiedenen deutschen Wörtern übersetzt. Man benutzte dabei nicht besonders häufig *scheinen*. Zwar wurden verschiedene deutsche Ausdrücke verwendet, aber die Ausdrücke hatten meistens die gleiche Struktur, dass man das Anerkennungsobjekt als Subjekt in den Satz stellt, um seine Erscheinung auszudrücken. Daher haben sie semantisch eine andere Richtung als MIERU/OMOWARERU. Außer *scheinen* wurden Verben wie *wirken*, *aussehen*, *vorkommen* benutzt, um denselben Eindruck zu erwecken.

Obwohl *scheinen* und MIERU/OMOWARERU in Deutsch-Japanischen und Japanisch-Deutschen Wörterbüchern scheinbar die gleiche Bedeutung haben, unterscheiden sie sich

doch grundlegend. Da MIERU/OMOWARERU ein Ausdruck passiver Wahrnehmung ist, ist das Wahrnehmen nicht aktiv. Wenn man aber diesen Ausdruck hört, lässt sich das Wesen der passiven Wahrnehmung vermitteln. Daher hört man auch im Erzählteil der auf Japanisch geschriebenen Romane die Stimme des Erzählers. Mit dem deutschen Verb *scheinen* versucht man dagegen objektiv auszudrücken, wie ein Mensch oder ein Gegenstand aussieht.

Die Weise, wie man einen Sachverhalt erkennt und formuliert, ist im Deutschen und im Japanischen verschiedenartig. Die beiden sind trotzdem am Ende nicht ganz weit verschieden. Zwar wird im Japanischen gern subjektiv wahrgenommen und formuliert, aber das Subjekt steht in der japanischen Gesellschaft eigentlich für alle und jeden. Daher ist das Subjekt nicht individuell, sondern kollektiv. Was der Erzähler eines Romans mit dem Verb MIERU/OMOWARERU erwähnt, das ist keine individuelle Meinung des Erzählers, sondern Konsens von allen Personen im Roman einschließlich der Leser. Das deutsche Wort *scheinen* benutzt Thomas Mann dagegen in einer objektiven Haltung, mit der er den Gegenstand objektiv mit Wahrscheinlichkeit beschreibt. Aber die Frage, wer über die Wahrscheinlichkeit urteilt, taucht auf, wenn man darüber gründlich nachdenkt. Ende des 19. Jahrhunderts entstand allmählich eine solche Frage oder der Zweifel an Objektivität. Auch die Erzählweise des Romans veränderte sich mit der Zeit. Zum Beispiel benutzte Franz Kafka das Verb *scheinen* anders als Thomas Mann. Ein Vergleich, wie diese beiden Schriftsteller *scheinen* im Roman verwendeten, wäre ein interessantes Thema, um die Veränderung der Erzählweise in deutschen Romanen zu analysieren. Dieser Frage wird die Verfasserin in einem nächsten Forschungsschritt nachgehen.